a.n.

a ZINE by
anarchist_neko

REDUX EDITION

a.n.: a ZINE by anarchist_neko

—REDUX edition—

To my friends, foes, and everyone in between... with love.

「アナーキー」

貶めらるること常なりて、理解せらるるは夢更になく
今日の〈恐怖〉、それは汝なり
大衆叫ぶ　汝は秩序の破壊者なりと
果てなき戦の殺戮者なりと
叫べ！ かの語の真意は
それを求めざる者らに届かざるが故に
ああ、高潔なるその語よ。汝は凛として清く
吾が理想の全てを示す
汝を未来に授く！ 人々が
自身とその上なるもののために生き始むるその日に
それは陽光とともにか、嵐の動乱とともにか
確かなるは、その日の訪れのみ
吾はアナキストなり。ゆえに
何人をも支配せず、支配もせられず！

John Henry McKay. 1888. ‘Anarchy.’

目次

献辞 i

「アナーキー」 iii

目次 iv

0　アナキズム

「2025 年 8 月の私のアナキズム」宣言 2

I　暴力

アナキストとして投票することについて 12

インターセクショナリティ 15

「フェミニズム」とは何か、何であってほしいか 19

「あかね空」 22

II　世界

「女性」の「定義」 24

定点としてのセックス 31

小学生でもわかること 33

「炎」 37

III　現状

「当たり前の理」なんかじゃない。 40

パンとバラとモモ 43

なぜおしっこはもれるのか 45

「無題」 47

IV　革命

静かな革命 50

ツイッター以外でなんか活動してんの？ 54

できることをできる限り最大限に 56

「合成クオリア」 57

V　物語

中立的な観点 60

neko 62

「バグ」宣言 72

「あとがき／まえがき」 77

VI　虹

初出一覧

0

アナキズム

「2025年8月の私のアナキズム」宣言

0.「アナキズム」

2025年8月の私は、自分らしく生きたい。

本来、この権利と自由はすべての者に保障されているはずである。だから、自分らしく生きられる共同体にすべてのひとが属せ、無数のそういった共同体が平等に協力し合うことで成立している社会を、私は求めている。すべてのひとがそれを可能とする社会を求め続けることを目指す運動を、私は「アナキズム」と呼んでいる。

1. 暴力

2025年8月の私のアナキズムは、暴力行為を拒絶する。

自分らしく生きる権利と自由は、本来、すべてのひとに保障されているはずである。暴力は、それを奪い、尊厳を傷つけるもの。だから、避けられる暴力を行使することは、私のアナキズムに反する。

そして、だからこそ、私や私の大切なひとたちが、なんらかの暴力の被害に遭い続けているときには、それがいかなるかたちであろうと、私は私たちをまもるため、どのような手段も厭わず徹底的に抵抗する。そのときに限り、必要最小限の暴力の行使を自らに認める。ただし、「本当の敵」は銃を向けてきた個人ではなく、加害者をうんだり、うむことを防がなかったり、あるいは加害を正当化したりする思想や制度、構造自体であることも、決して忘れてはならない。そして、私たちの抵抗に際して、すでに周縁化されている者たちばかりが報復の対象とされたり流れ弾に当たったりすることも。

アナキストであるということは、すべてのひとが自分らしく生きられる社会の実現を求めること。だから、暴力を、それを生み出す根源まで徹底的に遡り、そのすべてを拒絶し続ける。そして、自分らしく生きる権利を踏みにじられたときは、徹底的に抗う。そのために、なにが「暴力を生み出す根源」なのかを常に考え続け、聞き続ける、ということ。

2. 世界

2025 年 8 月の私のアナキズムは、世界が流動的でぐちゃぐちゃとしていることを理解している。

世界は、ぐちゃぐちゃとしている。私たちも、私たちらしさも、社会も、社会的交流も、自然も、決して単純なかたちで描くことはできない。だが、ぐちゃぐちゃとした世界が自分を殺しにかかってくるとき、繰り返される抑圧と搾取と暴力を理解できないのは、怖い。だから、私たちは世界を抽象化し、単純でわかりやすく絶対的な図形の繰り返しで描こうとする。そうやって世界を説明し、理解したつもりになる。本質主義的で二元的な「定義」で、曖昧なものを排せたつもりになる。「敵」と「味方」をつくり、絶対悪と永遠の仲間を得た気になる。そして、いざそれらの「定義」に反するものがあれば、「異常」な「例外」として、無視するか抹殺を図る。そうやって、世界を正確に映し出す鏡を作れたと、満足しようとする。それこそが暴力を正当化するイデオロギーの再生産だと気づかぬままで。

だが、世界はぐちゃぐちゃとしている。静的な単純を求めるのは自然でなく、解釈をする私たちにすぎない。綺麗に張られた薄い氷の下は、本当は真っ暗な空洞でしかないことに、ある日、ふと気づいて、また嘘を重ねて逃げることになる。本当に対峙すべきものを見誤り続けながら英雄を気取り、一部以外の物語を「例外」として排除するだけの理論を堅持し続ける。そして、永遠に前に進めぬまま、薄氷の上で恐れ続ける。

アナキストであるということは、世界がぐちゃぐちゃとしていることを一旦認めるということ。すべての「説明」が一定の不十分性を持っていることを認め、それの更新を続けると同時に、常に目前のぐちゃぐちゃとした世界それ自体を、どんな「説明」よりも優先するということ。私が知りうることや書きうることは常に不完全であると認め、これまで「例外」と

して排除されてきた者たちの物語を積極的に聴き続けるということ。

3. 現状

2025 年 8 月の私のアナキズムは、自分らしく生きる自由や尊厳をすべてのひとが奪われ続けている世界に生きていることを認め、これに徹底的に抵抗する。

私たちの世界は、暴力を正当化するイデオロギーに縛られている。一部を「普通」とし、「普通」以外への暴力を正当化するそれは、状況や環境によって、国家体制主義、資本主義、本質主義、セクシズム、レイシズム、able 主義、allo シスヘテロ主義、生殖主義、家父長制、植民地主義、排外主義、人間中心主義、あるいはまだ私が意識できていないさまざまな規範や制度、権力構造として具現化されている。その総体こそが「秩序」であるとされ、この「秩序」をまもるために暴力を振るい、これより逸脱しようとする者を罰することを求められる。

私たちは皆、絡み合う無数の属性から成り立っている。その一部は「普通」であるとされ、一部は「異常」であるとされる。一部は、より「異常」なものを排除するために「多様性」として取り込まれて容認される。「秩序」のなかで、私たちは「普通」でないことを理由に、日常的に排除され、支配され、搾取され、周縁化され、被害者であることを求められる。「秩序」のなかで、私たちは「普通」であることを理由に、日常的に排除し、支配し、搾取し、周縁化し、加害者であることを求められる。「秩序」

をまもるため、そうやって私たちは加害と被害を繰り返しながら生活することを求められる。

アナキストであるということは、自分自身もまた、この「秩序」から逃れ切れていないことを自覚した上で、暴力を正当化するこの邪悪な「秩序」を破壊するために戦い続けるということ。そのために、この「秩序」の背景にある暴力のイデオロギーの存在を見破り、これに立ち向かい続けるということ。だからアナキストは、反資本主義者であり、フェミニストであり、Queer であり、エコロジストであり、反 able 主義者であり、反レイシストであり、さらに逸脱者であり、革命者であらなければならない。

4. 革命

2025 年 8 月の私のアナキズムは、私たちの日常的な革命の重要さを理解している。

暴力を正当化するイデオロギーは、私たちの挨拶から日々の献立、布団の中に至るまで、あらゆるところに存在する。それは私たちのあらゆる日常的な行為を縛ると同時に、あらゆる日常的な行為によって、維持され再生産され再規定され続けている。

このイデオロギーは、大抵「中立的」だとか「普通」であるとされる言説にもっともよく表れる。だが、多くの場合それを指摘する自由は許されておらず、搾取と加害に基づいた「秩序」に反抗すれば「偏っている」とされ、「過激」で「危険」であると咎められる。分断を図る「暴力的な反

社会的勢力」であるというラベルを貼られ、国家や資本家によって、あるいは労働者や「人権家」によってすら、罰せられる。生活の手段を奪われ、医療へのアクセスを拒否され、他方で「病気」の「犯罪者」とされ、謀略と拷問の末に殺される。そして、斬り落とされた首と面白おかしく誇張された噂話を通じて、「普通」を再生産することを求められる。私たちは、だから、「中立的」で「普通」な言行ばかりしか、繰り返すことはできない。私たちらしく考え、喋り、身体を動かし、生きる自由は、ここにはない。

だが、同時に。この「秩序」の支配の中でも、私たちは常に多少の選択を許されている。もちろんこの「秩序」による支配を強める選択肢しかない場合もあるし、望ましいと思う選択肢が自他を危険に晒してしまうから実質的に選択不可能な時もある。だが、ときには、抵抗のための選択肢がそこに紛れ込んでいることもある。それは、「小さ」くて「静か」な抵抗かもしれない。路上で座り込んでいる方に声をかけてみるとか、肉の代わりに豆腐を買うといった「程度」のことかもしれない。しかし、それはたとえ僅かでも、世界を変えているという点において、確実に「革命」である。そして、ひとりひとりの「小さな革命」の蓄積を通じて、この世界は瞬きのたびに変化し続けている。私たちは、こうやって日常的に世界の在り方を変容させ続けて、次の私たちの行動を縛る仕組みをつくっている。

アナキストであるということは、私たちが日々繰り返す無数の選択を常に意識し、可能な限り最も「自分らしい」＝「アナキストらしい」と信じられる選択を繰り返しながら生きるということ。私たちの一つ一つの行

為が、この社会の複雑なシステムにひとり分の変化をもたらすことを理解すること。それはときとして、周囲がまねるという形でさらに広がっていく。そういった行為を通じて、暴力を正当化するイデオロギーを、共に、内外から徹底的に破壊し続けるということ。

社会変革に政府はいらない。革命に火炎瓶は必ずしも必要ではない。あなた自身が信じることのために、今できることを、今できるかぎり、最大限に。それは明日からの戦いに備え、今は休憩することかもしれない。

5. 物語

2025 年 8 月の私のアナキズムは、あなたの物語はあなたにしか書けないことを理解している。

私たちは皆、絡み合う無数の属性をもとに、加害と被害の「秩序」のなかに配置されて存在している。この「秩序」に縛られながら、次の瞬間にいられる場所とできることの選択肢を与えられる。そのような世界のなかで選択を繰り返しながら、さまざまなことを知り、経験し、考え、実践し続けている。

私は世界を「私」という単位でしか経験できない。私の撫でた猫は、常に無数の属性をもつ「私」が撫でた猫である。その「一撫で」は、この邪悪な世界の中で私がこれまで経験したことの結果経験されたものであり、絡み合う属性同士がその瞬間いる社会のすべての存在のすべて

の属性と緊張し合うなかで経験された「一撫で」である。ある一つや二つの属性として、猫を撫でることはできない。そうやって、私は「一撫で」ごとに世界を経験する。

あなたの経験も、分解することはできない。常に、「あなた」という単位での経験でしかない。あなたと私が同じ属性をもつからといって、ふたりが全く同じ「一撫で」を経験することはない。だから、私があなたの「一撫で」を代わりに知ることも経験することもできない。

だからこそ、私たちはともに語り続けなければならない。世界を私のように知りうるのは私しかいないし、あなたの世界を知りうるのはあなたしかいない。私が知りうるのはあなたの紡いだ物語の私なりの誤解でしかないが、あなたのことばを聞くことでしか、私は私以外の物語を知ることはできないのだから。

だからこそ、お互いの物語をまもり合わなければならない。あなたが紡いだ物語は、「あなたが語った物語」として私の物語の一部となり、私の物語の次のページをつくる。私たちの物語は、これまでも、これからも、緊張し合い、絡み合い、反発し合い、引用し合う。あなたの物語なくして私の物語は存在しないし、私の物語なくしてあなたの物語も存在しない。「私の物語」は、そのような意味で常に「私たちの物語」であったのだから、そこから恣意的に排除されてきた物語を、たとえば大文字の Anarchist や Feminist、Activist 以外のアナキストやフェミニスト、アクティビストらの物語を、決して忘れてはならない。

そして、だからこそ、アナーキーを求めなければならない。「私たち」の物語をまもり合うために、経験し語り合う機会を奪う暴力とそれを正当

化するもののすべてを、否定しなければならない。すでに多くのひとびとの物語が消されてきたことを意識しながら、すべての物語をまもるための革命行為を、続けなければならない。

アナキストであるということは、私たちの物語をまもり続けるということ。あなたの書いた物語を読み続け、私の物語を書き続けるということ。「語る価値」を否定されてきた者たちの物語の語られる場を、私たちなりに求め続けるということ。忘却や抹消を求められた物語の存在を、決して忘れないということ。そして、もっとよく語り合うために、暴力も、そのための「秩序」も、それらを求めるイデオロギーを再生産する言説も、すべて拒絶し続けるということ。

だから、アナキストであるということは、この宣言も、この先書かれることのすべても、常に不十分であると理解するということ。これが「2025年8月の私のアナキズム」でしかなく、更新され続けなければならないということ。そうやって、すべての者が自分らしく生きられる共同体に属している社会を皆が求め続ける社会のために、皆で語り合い、まもり合い、紡ぎ続ける、ということ。

I

暴力

アナキストとして投票することについて

投票は、暴力だ。

選挙は、「民主主義」の幻想を維持しながら国家の権力を正当化する暴力装置だ。非 allo シスヘテロに対する制度的な攻撃も、入管も、警察の暴力も、ホームレス状態の方の弾圧も、天皇制も、資本主義体制も、わたしたちが政府に権力を与えることで実現され続けている。その結果、今日もまただれかが傷つけられ、だれかが殺された。自公維に投票したことがないから、日本政府によって殺された者たちの死について罪を負わなくていい？　わたしたちの手が綺麗だなんて、思うな。

だけれども、投票しなければ、殺される。大好きなひとたちが殺されていく。わたしが、殺される。投票すれば、もしかしたら、わたしたちを守れるかもしれない。わたしの大好きなひとたちの負うはずだった致命傷は、重傷程度で治まるかもしれない。

それでも、自分の一票は、入管から天皇制にいたるまでのすべての

暴力を、確実に一票分だけ正当化する。これまでの、そしてこれからの暴虐に必要な権力を、また与えてしまう。今日（参議院議員通常選挙前日）までずっとずっと悩んで、なお自己防衛として一票投じた。この結論に至るまで、毎回、毎回、すごく悩む。そして、毎回、涙目で、自分たちを守るために、だれかを傷つけることを選ぶ。

「消去法で選べばOK！」
「自公維以外の候補者の名前を書けばOK！」
「どんな宝くじよりコスパいい！」

「投票するな」「投票しろ」なんて単純な話ではない。投票を呼びかけるなとも言っていない。実際、わたしは二枚ともに、わたしの思うlesser evilの氏名を、わたしが差別的だと信じることを主張していることを承知で書いた。これは「正当防衛」かもしれない。投票をしないことは与党に「有利」であり、わたしたちはその結果殺される。だから、これはきっと、わたしが殺されるのを、自らの自律性と尊厳を奪われるのを、わたしのために防ぐための暴力。わたしの大好きなひとたちが殺されるのを、彼人らの自律性と尊厳を奪われるのを、わたしのために防ぐための暴力。そうやって、今日も傷つけられることを正当化された多くの方がいる。明日も、そうやって殺される多くの方がいる。わたしやわたしの大好きなひとたちの身代わりとして。

「在外投票に間に合わない人のためにも、投票を！」
「投票できない人の代わりにも投票しよう！」

こんな話をしていたら、自分が立候補すればいいじゃない、と言われた。だが、わたしが選ばれること、選ばれうること、それは問題の本質的な答えではない。わたしはわたし以外の経験を語れない。同様に、あなたも、あなた以外の経験を語れない。投票を通じてにせよ、立候補を通じてにせよ、わたしたちのあげる声は、声を奪われているひとの代わりにはなりえない。それができると傲り、だれを殺すかを代わりに選ぶ権利が委任されているとも思わない。

搾取と虐殺を正当化するヒエラルキーの存在する限り、その中で個々の「権力者」やその集団を攻撃しても、構造それ自体は変わらない。この社会的な力の差異を生む構造は、わたしたち自身の選択できる言説や行為を縛ってはいるけれど、同時に、わたしたちのそれらによっても、維持されている。その絶望と希望に気づくことが、まず「わたしの思う『アナキズム』」のはじまりであると思う。そして、それ無しに社会は変わらない。わたしたちは、自由にはなれない。

「罪悪感」をおぼえてもどうしようもない。だけれども、ごく一部に権力を与えることを正当化する制度を肯定し続ける限り、ましてや未だに一票の格差すら是正しない選挙の在り方の中でそれを続ける限り、解決になど辿り着けない。

社会を変えるのは政府だけじゃない。わたしたち自身の自発的な行動や自由な連帯、抵抗を、その力を、その喜びと恐ろしさを、忘れるな。絶対に、誤魔化すな。

インターセクショナリティ

インターセクショナリティの考えが、どうも誤解されているように感じられるので、わたしなりの理解をここに書きたい。専門家ではないことは、明記しておきます。

インターセクショナリティの説明として、次のようなものをよく見る：

> 「ある社会的属性を持っていたら別の社会的な属性を持っていないわけではない。例えばBlackの女性は、女性差別だけでなく、Blackとしての差別も経験する」
> 「差別の【軸】は一つではなくて、独立した数本だ。そして、マイノリティ属性を多く持つほど多くの【軸】で差別されるから、マイノリティ度があがる」

これらは一定に正しさのある説明であるとわたしも思うものの、「インターセクショナリティ」という考えが表すものとは、ややずれがあると解

釈している。例えば、一つめの説明は、Crenshaw[1]が批判しているものですらあるようにわたしは思う。そして、よく見るベン図を用いた説明は、この誤解をなおさらに広めてしまうものである。

これは、わたしの理解でしかないが、ある人間が、ある状況下で経験する特権や抑圧、周縁化や中心化は、殆どの場合、一つまたは数個の名前のつけられる「〇〇差別」では説明できない。どの差別も、それが構造的なものであるのならば、全て絡み合い、維持し合い、引用し合い、相互作用し合う。だから、それらはけして「独立した複数の軸」などで表されるものではない。

> わたしたちの社会は、暴力を正当化するイデオロギーに縛られている。それは、状況や環境によって、国家体制主義、資本主義、本質主義、sexism、racism、ableism、allocisheteroism、生殖主義、家父長制、植民地主義、人間中心主義、あるいはまだわたしが意識できていない様々な暴力的な思想などと、名前やすがたかたちを変えながら、社会に遍在している。これらは、たしかに表面的には大きく異なるが、すべて一部の人を「普通」とし、「普通」以外への暴力を正当化するイデオロギーのさまざまな顔にすぎない。
>
> 『「2022 年 8 月のわたしのアナキズム」宣言』

わたしは常に「うつ病のノンバイナリー（？）」であり、「うつ病」と「ノン

[1]Crenshaw, Kimberle. 1989. Demarginalizing the Intersection of Race and Sex: A Black Feminist Critique of Antidiscrimination Doctrine, Feminist Theory and Antiracist Politics. https://chicagounbound.uchicago.edu/uclf/vol1989/iss1/8

バイナリー(？)」に分解できるものではない。そして、本当はこの説明すら誤っている、わたしは「うつ病」と「ノンバイナリー(？)」だけでなく、無数の (社会的) 属性の総体であるから。だから、わたしがわたしの権利を求めたり経験を語ったりするとき、それは常に例えば「うつ病患者」としてのみでなく、他の属性の多くまたは全てを含めた「わたし」がすることである。

> わたしの経験や知識を分解することはできない。わたしの経験は、常に、「わたし」としての経験や知識でしかない。世界を経験するわたしは、常に無数の属性の総体である。わたしの撫でた猫は、常に無数の属性の総体としての「わたし」が撫でた猫である、それは、この邪悪な「秩序」の中で経験される「一撫で」である。わたしのもつ属性同士が絡み合うなかで、その瞬間いる社会のすべての人のすべての属性と緊張し合うなかで経験された、「一撫で」である。ある一つや二つの属性のみとして猫を撫でることはできない。
>
> 『「2022 年 8 月のわたしのアナキズム」宣言』

ある属性である者ら全員が同じ経験を共有するわけではない。さまざまな「当事者」がいて、その全員がさまざまな環境に生き、さまざまな経験をしている。わたしたちはそのひとり分以外、本当は理解など決してできない。だから、全員が等しく声をあげられ、またその声が等しく聞かれ反映される運動を、政治を、そして社会を、求めねばならない。「インターセクショナリティ」とは、そのための理論であり、実践であるとわた

しは思う。誤解された理解は、このためにはならない。

今年のプライド月間の時、ZOZO が人種や国籍に関するマイノリティについての言及を、SOGIE に関わるとされる差別と併せてしていた。ファストファッションを擁護する気はないが、これを「また別の差別問題」「タダ乗り」と主張していた人がいたについて、わたしは反対する。言及せねばならないはずなのに、ずっとずっと軽視してきたことでしかないと考えている。その軽視の繰り返しの一つの結果として、「女性」や「女性の問題」に規範性や普遍性を求め、一方でそれにあてはまらないさまざまな女性やかの女達の経験を周縁化したり透明化したり、あるいは積極的に排除することで成立する「フェミニズム」の存在が、あるのではないのか。

> あなたの物語もわたしの物語も、誰にも代弁などできない。
> あなたの物語を聞くことでしかわたしはわたし以外の物語を知ることはできないが、わたしが解釈した瞬間に、それはわたしの物語の一部でしかなくなるのだから。
>
> 『「2022 年 8 月のわたしのアナキズム」宣言』

インターセクショナルなもののみかたと運動を。

「フェミニズム」とは何か、何であってほしいか

わたしは、「フェミニズム」を家父長制、より正確には「allo シスヘテロ家父長制」を打破するための運動だと考えている。「Allo シスヘテロ家父長制」とは、allo シスヘテロ男性を中心に、それ以外の非バイナリー、女性、およびこれら以外の性別の方たちが周縁化されて形成された「家族」が期待され、生殖を通じて「家族」を再生産することを望ましいものとしながら、各制度を通じてこの「家族」関係の維持を図る社会構造のことだと考えている。

この理解では、「フェミニズム」の「敵」は allo シスヘテロ男性ではなく、社会に蔓延る家父長制となる。確かに、「男性」に権力、影響力、発言権が与えられがちなのは事実として解消されなければならないし、その結果、「女性」を中心とした多くが抑圧され殺されている。そして、これらの暴力は、この（allo シスヘテロ）家父長制社会の結果であると同時に、これを維持する〈力〉ともなっている。だが、自分の理解では、われわれはこの（allo シスヘテロ）家父長制社会に存在する以上、否応がなし

にそれに縛られ、多くの場合、その期待に沿うように行動している（そうしないと罰され、場合によっては殺される）。

この暴力的な構造への加担から自由な者がいると、わたしは思えない。少なくとも、これまでに多くの者が、自身の加害への加担を否定ないしは矮小化するために無罪を主張してきた。わたしたちは皆、被抑圧者かつ抑圧者としてこの暴力的な構造に皆が参加しているのだという理解は、実際に正確だと思うし、自身の差別性や規範などを問い直す目的でも大切に思う。そのような意味で、「敵」を特定のジェンダーや階級に求めることは、少なくとも「フェミニズム」の定義をそこに求めることは、不十分であると思っている。

この構造の中で周縁化されがちな集団がいないとは言っていない。だから、その集団を、アイデンティティとは独立に、「女性」と呼び、この意味での「女性」をフェミニズムの主体であると言うことも可能だと思う（Haslanger[1]のように）。だけれども、そうやって女性でない者、たとえばすでに周縁化されている非バイナリーや一部の男性を含んだ集団に「女性」という名を与えることが、わたしは十分に ameliorative であるとも思えない。

だから、わたしはフェミニズムの「主体」は全てのひとだと言うし、フェミニズムは「みんなのもの」だと言う。そして、allo シスヘテロの男性も、AMAB の非バイナリーも、AFAB の男性も非バイナリーも、フェミニズ

[1]Haslanger, Sally. 2000. Gender and race: (What) are they? (What) do we want them to be? *Noûs*, 34(1), 31 – 55.
hooks, bell. 2000. *Feminism is for everybody: Passionate politics*. South End Pr.

ムに allo シスヘテロ女性と同じように参加できると言うし、「フェミニズム」という運動において、等しく発言権を持つことはなんの問題でもないと言う。すでに発言の機会を奪われている方たちが安全に発言できる場を求めることは、運動の「主体」の話ではない。わたしの想定する「主体」には、いわゆるインセルやアンチフェミニストも含まれるだろうが、わたしは彼人らの思想を受け入れなければいけないとは一言も言ってないし、一つも思っていない。言っているのは、フェミニズムという運動において、ジェンダーやセクシュアリティを根拠に「主体性」を否定することが、理に叶っているとは思えないということだけ。

わたしの言う「フェミニズム」がもはやフェミニズムでないという意見も、一定に正しいと思う。実際、自分も自分が「フェミニスト」であるのか疑問に思うことも多い。だけれども、大切なのは何が「フェミニズム」か、誰が「主体」かではなく、いかにしてこの家父長制を打破していくか、いかに暴力や搾取、周縁化を終わらせるかではないのか。「フェミニズム」や「フェミニズムの主体」の定義がもし必要ならば、わたしたちの運動に「有益」であるかの一点のみが大切である。

「あかね空」

燃えるひかりのなかで私はためらう 。

II

世界

「女性」の「定義」

「女性」の「定義」という見飽きた問いについて、考えてみましょ。

「定義」とは

――まず、「定義」ってなんなのかな。あなたの言う「定義」の定義は？
――なぜそんなことを聞くのか。シーライオニングだ。
――そんなことないと思うよ。聞いてる理由は二つあります。一つは、「定義」ということばが適当に使われており、実際に求められているものが会話の途中でどんどんと変化していくのを何度も見てきたから 。もう一つは、定義という行為が非常に困難であることを指摘するため。

――簡単だ。

「定義」の定義 1

言葉や物，事象をほかの言葉，物，事象で規定し，説明すること

――だめ。いくつかの問題点を指摘しよっか。まず、「規定し、説明する」について。ある表現を〈規定〉しながら、「説明」することは出来ない。その表現の意味が確立しているのならば、その意味を変えぬまま、たとえ結果的に同じ意味を持つとしても、〈規定〉なんてできない。そして、〈規定〉すれば、その表現の意味は、当初から変わってしまう。逆に、意味が確立していないのならば、それの〈説明〉を求めるのはナンセンス。グランドに白線を描くことを考えてみて。あなたができるのは、すで引いてある線を真似て引き直すか、自分なりの新しい線を引くことだけ。どちらにせよ、新しく引かれた線は決して元の線ではない。

これを無視したとしても、なお問題が残る。その〈規定〉にせよ〈説明〉にせよ、その妥当性は誰も判断しなくてよいの？　聞き手らの同意も、説得することも、わたしがそれを「真」であると信じていることすらも必要とされていないけど、いいの？　じゃあ、これでもいいよね：

「定義」の定義 2

あかくてまるくてあまいたべもの

――ふざけるな。辞書を見ろ。

――グラウンドにすでに引いてある線を、指さしてみるってわけね。広辞苑には次のように書いてるね：

「定義」の定義 3

概念の内容を明確に限定すること。すなわち、ある概念の内包を構成する本質的属性を明らかにし他の概念から区別すること。その概念の属する最も近い類を挙げ、さらに種差を挙げて同類の他の概念から区別して命題化すること　(『広辞苑』[第六版])

ここでも、妥当性は問題にされていない。ならばわたしの定義になんの問題があるの？

――こんなの言葉遊び。常識でわかるだろ。

――「常識」に訴えるというのなら、「常識」もしっかりと定義してほしい。そして、「常識」というものが、大抵の場合、規範と不可分であるということもわすれずに。

――じゃあおまえが「定義」を定義してみろよ。

――正直、そんなの無理だと思うんだよね。厳密に定義するためには定義された表現のみを使用しなければならないけど、この場合それが可能であるか怪しいし、そもそも、「『定義』の定義」の定義も必要になる。でも、いったん受け入れてもいいような〈説明〉なら、できるかも：

「定義」の説明 1

あるディスコースにおいて、それに参加している集団で合意された、またはされると期待された、ある表現の使用方法に関する言語的ないしは記号的表現を通じた取り決め。

この〈説明〉を、以降のわたしたちの会話に限定した〈定義〉として採用することにも、さほど問題もないと思う。ただ、それはこのブログの外において、どれほど妥当かはわからない。だって、他の会話で「定義」ということばを口にする際、これにみんなが納得して従っているかなんてわたしにはわからないし、ましてや、それを取り決める権威などわたしにはないから。 わたしに出来るのは、わたしが妥当であると思う範囲で、誠実に〈説明〉し、それをもとに、今からこの文章ではこう使いますよと取り決める程度だけ。

〈定義〉と〈説明〉

――待て、〈定義〉と〈説明〉は同じ意味だろ。
――ううん。 わかりやすいように「りんご」について考えてみましょ。まず、〈説明〉から。

> 「りんご」の 説明 1
> あかくてまるくてあまいくだもの

じゃ、このとき、あおりんごは、「りんご」でしょうか。この〈説明〉では、「りんご」にあおりんごは含まれていないよね。でも、わたしたちの社会では、あおりんごはりんごであると認識されるし、実際「りんご」という表現をあおりんごを指すためにも用いてる。そこは異論ないでしょ？ じゃ、

修正されるのはどっち？　当然のように、〈説明〉の方です。

「りんご」の 説明 1′
あか色、あるいはみどり色の、まるくてあまいくだもの

じゃあ、今度は〈定義〉について考えようか。次のように、「りんご」を定義するとしましょ。このとき、あおりんごはどうなると思う？

「りんご」の 定義 1
あかくてまるくてあまいくだもの

あおいりんごは、ここではやはり含まれてないよね。

――同じように　定義を直せばいいだけだろ。
――そう？　ほんとに？　あなたは、先ほど「定義」の定義 1 で、「規定」という言葉を使ったよね。『広辞苑』による「定義」でも「概念の内容を明確に限定すること」と書いていたよね。

わたしたちは、「りんご」の定義 1 によって、「りんご」は赤色であると、「規定」にせよ「限定」せよしたんだよね。じゃあ、あおりんごは「りんご」ではない。だって、そう決めましょうねって言うのが、〈定義〉なんだもん。

――いや、「完全」な定義をすればいい、すべての女性に共通する普遍的なものを出してくればいい。
――できんのそんなこと？

> §66 “例えば、我々が「ゲーム (Spiel)」と呼ぶ事象について、一度考えてみてほしい。盤上のゲーム、カードゲーム、ボールを使うゲーム、格闘的なゲーム、等のことを言っているのだ。これらすべてに共通するものはなにか？” ——「なにか共通なものがあるに違いない。さもなければ「ゲーム」とは呼ばれない」と言ってはいけない——そうではなく、それらに共通なものがあるかどうかを見たまえ。 ——なぜなら、それらをよく眺めるなら、君が見るのはすべてに共通するようななにかではなく、類似性、類縁性、しかもいくつもの種類の類似性だからだ。繰り返すが、考えるのではなく見るのだ！ (ウィトゲンシュタイン, 2020, p.75)

さあ、「ゲーム」を過不足なく〈定義〉してみて。古今東西すべてのゲームを含み、かつそれ以外のなにも含まない、完璧な〈定義〉を。それが出来たら、「女性」を〈定義〉してみて。古今東西すべての女性を含み、かつそれ以外のなにも含まない、完璧な〈定義〉を。

——だからなんなの？

——女性の不完全な〈説明〉もまた、一部を周縁化し、それはそれとして大きな問題だよね。でも、女性の不完全な〈定義〉は一部を女性でないと宣言してしまう。しかも、わたしたちが今話しているのは、例えばある本の中での「女性」ということばの使い方などではなく、「女性」という概念それ自体の〈定義〉。それは、誰が「女性」で、誰がそうでないかに関する「取り決め行為」をしろということ。 どうしてわたしやあなたに、「生

物学」の何千年も前から存在する女性を〈定義〉する権限があるの？　一部の女性を「女性でない」と線引きする権利があるの？　あおりんごを見たとき、神を気取って「これはりんごでない」と言うのは、わたしやあなたに許された行為であるとは思えない。

わたしたちに出来ることがあるとするなら、それは、可能な限り誠実な、それでも不完全な、〈説明〉でしかない。だから、わたしたちの理解が大きく変化したとき、わたしたちの今考えつく最善の説明は、時代遅れで、もしかしたらその上差別的ですらある〈説明〉となるかもしれない。

それは怖いことかもしれない。自分の苦しみや喜びの根拠が、流動的でふわふわとしたものであるというのは、不安になることかもしれない。でも、私たちって、なんのために「女性」を〈説明〉したいんだっけ？　すべての女性が、一人残らず、自律的に、自由に、尊厳を奪われることなく生きられる社会を実現するためじゃなかったっけ。ならば、そのためにより適切で、よりよいものとなるように、「女性」の〈説明〉が変わることって、むしろ良いことではない？　そもそもわたし達自身、社会の変化とともに、ぶつかる問題も、解決できる問題も、あるいは自己認識すらも、変化してるんだから。そのたびごとに新しい〈説明〉を考え続けていくことって、普遍的な「女性」の説明にせよ定義にせよを求めるより、よっぽど大切じゃない？　よっぽどよっぽど、「フェミニズム」じゃない？

＊　＊　＊　＊　＊

ウィトゲンシュタイン, L, 鬼界彰夫 (訳). 2020.『哲学探究』. 講談社.

新村, 出 (編). 2008.『広辞苑』, [第六版]. 岩波書店

定点としてのセックス

「性別の基準は、常に性染色体だ」と言っているひとたちに対して、わたしは「あなたの考える『基準』は、性染色体に関する知識が一般に浸透する前後ですら変化していますよね」と思うけど、あのひとたちからすれば、セックスという「真理」があって、それをより正確に表せるようになっただけ、となるのだろう。セックスは普遍的で固定的で、超越的な「真理」たる基準であるという考えで、技術や時代が進歩しても、ただその「定点」へ近づいているだけと解釈される。そして都合の悪い「例外」は、論点先取りの議論で「包摂」するか棄却する。いくら矛盾を説明しても、いくらその理解が「生物学」に反しているとか非論理的だとか社会の実態を反映してないとか言っても、こっちが「カルト」で「お気持ち」で「事実を無視」していて、「非科学的」で、一方で「衒学的」で「アカデミズム」で「机上の空論」だと拒否される。それでトランスの未成年をミスジェンしたり、一部の女性を「例外」にして「女性スペース」を「TRA 側陣営」や「TGism カルト」から守ると言い始めたり、挙句にはペニスのあ

るレズビアンやペニスのある女性を受け入れるレズビアンは「真のレズビアン」でないだとか言い始めたりする。いくら実態に即してなくても、「セックスは普遍的である」が議論のアルファでありオメガであるから。

どうすりゃいいのかわからん。こういう考えのひとは放置して、コミュニティ内で頑張ってけばいい、って言いたいとこだけど、なかにはトランスやクィアの子の担任や友人、保護者やかぞくもいるだろうに。そのひとたちのせいで、深い傷を負ったり、ここにはもういなくなってしまったりした方たちもいるだろうに。

セックスも、なにがセックスかも、変化しつづけている。もとから「定点」じゃない以上、こっちが「変更」しようとしているとされる「定義」など、少なくとも明文的には存在しないし、「定義」できるかすらも怪しい。現状のごちゃっとした理解の不十分な「説明」はできるが、その説明も、それの語られる時代や社会に意味も可能性も依存する以上、決して「定点」たり得ない。結局、やっているのはセックスを絶対的なものであるとすることで世界を単純化しているだけ。それは、ぐちゃぐちゃとし不安と抑圧と暴力にあふれた世界を説明し、そこで束の間の安心を得るための戦略なのかもしれないけれど、問題をごまかしているだけでしかないし、なんの解決でもない。全然「ラディカル」でもなんでもない。

小学生でもわかること

　また、ノーマスク集会をしてるのを見た。イライラしているうちに、先日、「生物の授業から、やり直すことをお勧めします。本気で、小学生でも解ることが解らなくなっている。」とリプされたのを思い出した。

　小学校で教わったことのうち、どのくらいが、今でも十分正しく、補足や注釈、条件、あるいは例外規則の設定等なく、問題なく受け入れて運用して良い知識なんだろーか。英語や「国語（マジこの言葉嫌い）」も、たとえば言語勉強しているひと連れてきたら、ほぼ根底から書き変わるし、漢字ですら異字体の説明すらされずに正誤を付けられた記憶。算数はほぼ全部公理系（ごめんね、詳しくない）によるよね？　遺伝って、メンデルくらいなら小学校だっけ？　少なくともわたしが使っていた頃のは、高校教科書でもかなり単純化しすぎてた。公民や経済みたいなことやった気もするけど、あれは中学かな？　今はめちゃくちゃ文句言いたくなるだろうな。

チョムスキーの『アナキズム論（*On Anarchism*）』に、好きな記述がある。体制に迎合する主張をするのは簡単だ。CM と CM の合間に十分伝えられる。多少雑でも、すでに受け入れている知識と整合がつく以上、肯定的に補足され受け入れられる。一方、体制に歯向かう主張はエビデンスと緻密な論証を求められる。それらを提示するのには時間と労力が不可欠だが、そんなものを放映する時間はない。

ジェンダーやセックスについての厳密な議論は、Wikipedia の数ページでは説得しきれない。だから難しい本がいっぱいあって、その解説書の解説書だけでひと棚つくれて、それでもなお理解しきれないわけで。一方、「セックス／ジェンダー二元論」は、小学校の教科書に載せられ、メディアで繰り返される。「簡単」だから。繰り返されるのは、往々にして、規範的で納得しやすい後者のみだし、それを否定する膨大な論証は、通勤中の電車の中では読みきれない。だから、「簡単」で「わかりやすい」説明は延々と繰り返されていき、実践されていく。では、なぜそれは「簡単」で「わかりやすい」のか。それは、わたしたちの知っている他のことと整合がつけやすいから。では、なぜわたしたちはそれを知っているのか。それは、支配的なイデオロギーだから。「わかりやすさ」とは権力それ自体であり、「わかりやすい説明」はそれの再生産行為にすぎない。少なくとも、そういう場合も少なくない。

冒頭の発言は、「性別」の話題で出てきた発言なのだが、小学校の教科書には、もしかしたら allo シスヘテロの「女」と「男」しか想定されていない記述があったかもしれない。だが、それが「正しい」か「誤っている」

かは、真剣に考え続けなければいけないし、簡単に答えが出せるものでも、出してよいものでもないだろう。「小学校の知識が無駄」とかそういう話ではない。勿論有益な事もある。ただ、たとえ研究が進んだとか、そもそもクソみたいな記述のされ方や「標準化」がされていたとかでなくても、当然のように（そしてそれは必要だけど）たくさん省いてたくさん誤魔化して説明していることはある。「学術的な議論」と「陰謀論」を区別するのは、とても難しい。

では、なぜわたしはマスクをしているのだろう？

わたしがコロナ陰謀論の「論文」を送られても読まないように、チョムスキーやバトラーを送られても読まない／読めない方がいるのはわかる。そもそも、これに反する記述が世界に溢れる以上、見つけられない方もいるのはわかる。だから、「ワクチンにマイクロチップ入ってるわけあるかよ www」と思うように、「ノンバイナリーの身体ってなんだよ www」と思い続けたまま、それを繰り返してしまうひとがいるのもわからないわけではない。そして、これらの違いを問いただされたとき、わたしがなんと答えれば良いのかわからなくなるときもある。勿論、マスクの有用性についてのデータも論文も示せるし、『ジェンダー・トラブル』を投げつけることもできるが、同時にわたしが受けてきた「常識」を再生産しているだけでないのか不安になる時もある。「身体性別」がうんたらと言っているひとたちとやっていることがどれほど違うのか、わからなくなるときもある。

わたしにわかるのは、わたしなりに勉強して正しいと思えることと、ど

うであってほしいかだけしかない。その区別がつかないときもあるし、お互いに形成しあってるとも思う、それも良いことなのかわからないけど。だから、自らを疑い続けながらも、自分の思う正しい行為を繰り返すんだけど、それも駅前のノーマスク集会と同じに見えちゃってるのだろうか。

　それでも、マスクはしようね。ノンバイナリーの身体はノンバイナリーの身体だよ。少なくともわたしは、そう考えている。

「炎」

触れれば幸せになれる炎があると聞いたのは中学生の頃で、
私はそれ以降、それをなんとなく探し続けていた。
事実、その暖かさを頬に感じたこともあれば、
その冷たさに震えている気がするときもあった。

一度だけ、その炎だと思われるものを目にしたことがある。
私はあまりに明るすぎるそれに躊躇って、
水をかけてすべてを忘れたことにした。

あの夜を思う。
無限に存在する世界のいくつに、
焼けた手をつないでいる自分がいるのだろう。

あるいは、これは後悔などではなく
高みの見物なのかもしれない。

III

現状

「当たり前の理」なんかじゃない。

とあるアクティビストのブログ記事が有料であることに茶々を入れたアンチフェミニストがいたらしい。それに対して、「100円が払えなくて読めないのなら言及するのを諦めろ。アクセスできないのは、『ごく当たり前の理』だ。『無理筋の差別をねつ造』するな」といった旨の反論があった。この「反論」は、どんな「文脈」や「発端」があったとしても、わたしは許さない。

始めに断っておくと、「自分も生活があるから無料公開はできない」なら、わたしは一切咎めなかった。多くの方が、わたしも含めて、資本主義体制の中でそうやって生きている。本人や周りが不満だろうと、搾取性に気づいていようと否と、実際問題としてそれを完全に避けて生活するのは難しい。だから、無料でないことそれ自体を咎めるのは理不尽だと思うし、「無料にしろ」と迫るのはそれこそ「無理筋」だろう。「社会主義者／フェミニストなら、今すぐ自分の労働の成果をすべて無償化しろ」などとはだれも言わないし、言うべきでない。

だが、そういう社会であることは、決して「ごく当たり前の理」ではない。今の社会経済体制下において、ブログ記事に払う「お金がない」、あるいは、自由に払えない理由はさまざまにある。性別や人種、心身の特性・特徴等によって、本来得られるべき賃金や支援を得られない者は多くいる。差別や抑圧、搾取等に苦しめられて就労が困難となり、不本意に休憩せざるを得ないひともいる。医療費等にお金を回す必要があり、自由に使える金銭が非常に制限されているひとだっている。「たかが100円」は一食分の金であることもあるし、それだって常に余裕のあるものではない。こんな不条理で不平等な社会経済体制のなかで、金が払えなければ情報や娯楽へのアクセスを諦めねばならないのは、「ごく当たり前の理」などではない。

お金がないのならアクセスできなくて「当然」である、すなわち、お金がある者だけがアクセスできてよいという価値基準は、少なくとも現状において、社会において周縁化されていない、いわゆる「マジョリティ」以外を一層排除するものでしかない。この体制から脱するのは現実問題としては困難ではあるものの、この価値基準を無批判に再生産することは、必需品を買うためにすら過酷な搾取を甘んじて受け入れ続けなければならない現状の正当化、そして深刻化にしかつながらない。

たとえ不誠実な発話への反論であれ、人権に携わる者がこれに対して「無理筋の差別をねつ造」などと言えることを、ましてや金がないなら「言及しなければいい」とまで言えることを、わたしは本気で許せない。それは投票に人頭税の支払いを求め、実質的に人種マイノリティの発言権を奪ってきたジム・クロウ時代の価値観といったいなにが違うのか。

金のあることは、なにかへのアクセス権や発言権、あるいは社会運動へ参加する権利の根拠ではないし、無いことはこれらの権利を奪う理由にはならない。少なくとも、そうあるべきではない。

貧困者差別やレイシズム、エイブリズムなどといった思想は、ほかの軸でもマイノリティとして抑圧されている者らを一層強く抑圧する。抑圧されれば自由に使える金はおろか、生活費すら一層減ってしまう。そのようななかで「金がないなら諦めろ、言及するな」と言うことは差別の助長以外のなにであるというのか。これらの抑圧構造を再生産し強化させながら謳う「女性の権利」は、自己矛盾以外のなにものでもない。そして、そのような主張の運動を展開する者たちは、わたしたちを抑圧するという点でアンチフェミニストと変わらない。少なくともわたしは、そういった主張を「フェミニズム」であるとは思えない。

パンとバラとモモ

こころも飢える、からだのように。パンをくれ。そしてバラをも。

—— James Oppenheim. 1911. ‘Bread and Roses.’

Twitter のプロフに書いている「🍞, 🌹 & 🕊 for all!」の意味を、たまに聞かれる。「パンとバラ」は女性参政権運動のスローガンに由来する。

> パンとは、すなわち家、屋根、そして安全。人生のバラとは、つまり音楽、教育、自然そして書物。彼女たち[女性]の票と、彼女らが声を持つ政府は、生まれ来るすべての子どもたちにパンとバラが与えられる国へと一歩近づけるだろう。「パンを皆に！　そしてバラも！」が達成された日には、監獄も、絞首台も、工場で働く子どもたちも、路上でパンのために働く女の子も、いないのだ。　(Todd, 1910, p.619)

サフラジェットにも色々問題があるのだけれど（これはそのうち書くかもしれない）、「パンとバラを！」というスローガン自体には、賛同している。すべての者に日々のパンを。すなわち、必要十分に、健康でバランス良く、エシカルな食事を手に入れられる社会を。医療を。安全で落ち着ける家を。安全を。そして、日々のバラを。「バラのようなもの」でも議席でもなく、バラを。教育を。芸術を。自由と尊厳を。幸せを。これらは対立するものではないし、どちらかが欠ければ、もう一方も不足する。

モモは、友だちとの会話の中で挙がってきた。解釈が一致しているかはわからないけど、わたしは「ちょっぴりの贅沢」と理解している。正確には、ちょっぴりの贅沢が出来る経済的、物質的な余裕、たまにはおいしいモモを買う余裕を、すべてのひとに。

だから、Bread, Roses and Peaches for All! パンとバラとモモの略取を！

*　*　*　*　*

Todd, Helen. 1910. Getting Out the Vote. *The American Magazine.*

なぜおしっこはもれるのか

「#おしっこもれる」というハッシュタグについて。元々は、「『トイレに行く』とか言う女は下品、せめて『お手洗い』と言え」みたいな話があったので、それへのカウンターとしてはじまった。そのうち、排泄について話すことをタブーとすることへの対抗とか、だれでもしたいときに安全に排泄できるトイレの必要性とか、いろんなものを込めたスローガンになった。

排泄は下品でも汚くもなく、日常的で必要な行為の一つ。今は少しマシになったのだけれども、わたしはトイレが近い上に外のトイレを使うのが苦手なので、外で映画観るときは水分制限したりしてた。そういう話題を忌避すべきものや「汚い話」としたり、あるいは「ただの笑い話」で済まそうとしたりすることは、問題だと思う。下着を汚すこと、汚しそうになることそれ自体は、常に「汚い話」じゃない。「笑い話」でもない。ましてや、「ドキッとする話」でもない。安心して使えるトイレがないのは、ただ、社会的な不平等の反映に過ぎない。

IBS の話もわたしのタイムラインなら普通に出てくることは多いけれど、やはり忌避すべきものとして現れることも少なくない。排泄以外もそう。汗も、生理も、成人のオムツ使用、ライナーやタンポン、あるいは例えば胸やペニス、クリトリスや膣を含む身体の話もそう。自慰やセックスの話もそう。体毛もそう。状況を問わず、笑いや性のネタにされることがある。タンポンの話をしたら、「興奮する」という旨のリプをもらったフォロワーもいる。そういうのを問題だと、わたしは言っている。これらは「普通」の話にしなければいけない。

状況に応じて、排泄を含めた日常的な行為を「汚い話」や「笑い話」や「ドキッとする話」とすることに反対しているわけではない。問題なのは、それがデフォルトであること。確かに、面白おかしく「#おしっこもれる」と書いてるときもあるし、書いてる方もいる。だが、同時に、このハッシュタグを使っている方の多くは、なんらかの理由により、安全にないしは安心して排泄することに困っている。それを小さな声で主張するハッシュタグがこれ。

だから、次にこれを見た時、笑いながらでも構わないから、排泄やそれ以外に困っているひとたちのことを、どうか考えて欲しい。

んじゃ、エナドリ飲みすぎたので今日はこの辺で。

#おしっこもれる

「無題」

世界が終わるとしても、その日まで今日は続く。

ただそれだけの事実が、陰鬱な朝焼けを一層明るくする。

生乾きの下着についた匂いのように、
隠せども、隠せども、私の身体を逃がさない。

IV

革命

静かな革命

社会変革は火炎瓶やデモ、あるいは投票によってのみもたらされる訳ではない。オンラインだろうとオフラインだろうと、わたしたちは会話や消費、労働といった日常行為を通じて、日々、少しずつだが確実に、社会を変え続けている。漸次的な変化は蓄積し、わたしたちが次に取る行動、取りうる行動、そしてわたしたち自身をも、大きく変容させている。

わたしが買わなかった高野豆腐は、あるいはその代わりに買った挽肉は、明日の入荷数を決定する根拠の一つとなり、スーパーの在庫数を通して、わたしやわたしの周囲のひとの献立を、さらにはそれを通じて、妊娠させられるウシの数を、変える。わたしがコロナ禍の夕方に渋谷のスクランブルを渡れば、「スクランブルを渡るひと」は一人増え、他者が同様の行動を取る際の心的障壁を一人分だけ減らす。社会問題に敏感であるという姿勢をとる者が差別的な表現を平然と口にすれば、差別的なステレオタイプを一言分だけ確実に許す。わたしたちがもたらし続ける変化は蓄積し、やがて自分や自分の守りたいひとたちを、特に

社会的な弱者を、追い詰めていくことになる。

もちろん悪い結果ばかりがもたらされるわけではない。誤っていると信じる行動を避けながら代替案を示すことだって、可能だ。わたしたちのさまざまな行為はやわらかな「プロパガンダ」となり、同様の行動を取るよう、取れるよう、世界を優しく変えていく。わたしたちは、そうやって日常的な行動を通じて社会を変え続けている。そして、あらゆるひとのあらゆる行為の結果として生じたそれを見ながら、あるいはそれに縛られ続けながら、自身のあるべき姿や取るべき行動を問い直し、判断し、形成し直し続け、さらにそれをまた社会に反映させ返している。われわれの生活は、全員が嘘偽りのない「声」を出せ、消去法で代弁者を選ぶ必要などない「投票」として、永遠のフィードバック・ループを形成している。個人の行動以上に政府を通じた改革へ大きな期待を寄せているとしているとしても、少なくとも市民が変わらなければ政府は変わらない ―― 「民主主義」社会であればなおさらに。

ならば、わたしは意識的に「正しく」あって、あるいはあろうとして、「一票」を投じ続けたい。少なくとも、自身の思想に反する意見を社会に反映させることを避け続けたい。それはなによりも大切で本質的な政治運動であり革命行為であると、わたしは信じている。

わたしはそういった思いでずっと「自粛」を続けてきた。他者を死に至らしめる可能性の無視できない行動を、十分に避けられるのに選択するのは暴力でしかないと、そういった行動をとって良いと示すことは、わたしやわたしの思想にとって看過されるべきものではないと、そう思って

生活してきた。「差別」という暴力と戦いながら、十分にできる対策を怠り、避け得るリスクの高い行動をとるなどして他者を感染させるのは、わたしには自己矛盾にしか見えなかった。少なくともわたしは、わたしのできる範囲ですべきだと思うことを可能な限りして、すべきでないと思うことを可能な限り徹底的に拒絶することで、政府の愚策に頼らずともできることがあることを、そうやって生きることができるということを、同じ考えのひとたちと示し続けたいと思って行動してきた。「宣言」が明け、都心の往来は確実に増えた。夕方の山手線には酒の匂いが漂うようになり、自宅からコンビニまでの数分間ですれ違うマスクのない集団の数は倍増した。アクティビストを自称する方すらもが旅行し、密集して遊んでいる。わたしはわたしの基準で、リスクが充分に下がったと確信できていない。確信できない以上、そして当分の間外出や外食を避けられる状況である以上、わたしはこれらを可能な限りで避け続けるしかない。政府の「宣言」解除はリスク評価に用いるデータの一つではあっても、自身の信じる正しさを無視する為の免罪符ではない。これが過剰な反応なのか、正直なところ悩んでいる部分もある。実際にそうである可能性も、否定しない。ただ、勝手な思い込みだとしても、懸念を持つに十分な理由があると判断し、そしてそれに基づく行為をもうしばらく続けられるのなら、わたしはわたしの思う正しい行為を繰り返すだけ。そのことでその基準への不信感を表明し、感染拡大防止への協力を求め続けるだけ。政府がどんな計画を持とうと、わたしはただわたしとして、わたしの信じる正しい行為をできる範囲で繰り返すだけ。もちろん、「できる範囲」は個々によって当然変わる。わたしがこのような行動を取れる

ことは、特有の環境や特権の結果でもある。だから、お互いにお互いが可能な限りの情報を収集し、共有し、軌道修正を常に続けながら、日々自分の可能な限りで求める自分であれるように生き続け、そして、そうやって生きている隣人たちを見つめて考え続けるしかない。そうやって繰り返し選択する行動が他者から見れば「不十分」だとしても、わたしたちには「できる範囲」以上はできないし、「できる範囲」がどこかなんて、本人すらも容易に判断できることではない。各々が、その時々でできる最も正しいことをし、過ちだと信じることを避けていくしかない。

だから、本当にそこまで考えた結果、あなた自身の思う「今取れる最も正しい行為」が、明日の夜にセンター街で会食すると決めることならば、それでいいと思う。実際、そういった会食を避けられないこともあると思うし。わたしも、自分がすべきだと思う行為を、できる範囲で繰り返し続けることで、自分の思う正しさを訴え続けるだけ。各々のできる精一杯の「正しい」行為を繰り返していくこと、少なくともそうしようという意識の積み重ねこそが、そして、皆にそうやって生きることを提案し続けることこそが、静かな、しかしなによりも大切な革命行為だから。

ツイッター以外でなんか活動してんの？

「ツイッター以外でなんか活動してんの？」とか「矢面に立たずに済む特権」とか「現場に来てみろ」とか言ってくるひとへ。

悪かったな、うつ病で。カムアウトできてなくて。

クィアであるということは、日々マイクロだったりマクロだったりするアグレッションに立ち向かい続けているということ。「普通らしさ」のロジックに支配され、クィアを殺そうとしている世界の中で、傷つきながらも、なお凛として抗い続けているということ。

クィアであるだけで、あなたは「活動」している。職場の会議室だろうと、学校の廊下だろうと、「家族」のいるコタツの中だろうと、布団の中であろうと、あなたは蜂起している。あなたは矢を全身に受けながら、なお、クィアとして、あなたとして、生きている。

「現場」。まるで日常の中で受ける攻撃とそれへの抵抗は、尺たるものではないかのような言い草。差別は、わかりやすい暴言と投石にしか無いような言い草。違う。差別とは我々を縛り、我々を嘲笑う社会構造

の中に偏在するもの。それを破壊することこそが、「ハンサベツ」であるはず。戦いの目的はなにか、それを忘れるな。

できることをできる限り最大限に

結局、わたしの言ってることは、ずっと、「わたしたちの表現や行為、会話とかの蓄積に制限されたり影響されたりしながら、わたしたちはさまざまな認識や行為等を繰り返し、それが繰り返されて、社会は更新され続けてますよね。これを意識して日々生きるのが、なによりも大事ですよね」ってだけな気がする。「ALT をつけよう」も、女性の定義が日々わたしたちの言語使用によって更新されていることも、すべて。だから、「社会」に縛られ影響されながらも、わたしたちが皆、より自由かつ自律的に「社会」を変える〈力〉をもてる世界にするため、毎日、できることを、できるかぎり、最大限にするしかない。それこそが、（わたし独自の解釈だけど）「行為によるプロパガンダ」なんじゃないのかな、って思ってます。

「合成クオリア」

所詮電気信号が見せた錯覚だったのだとしても、
分けた缶ビールの甘さとほろ苦さは
まだ、舌の奥に残っている

V

物語

中立的な観点

わたしは、今日りんごを食べました。

わたしたちは、常にことばと視点を選択しながら、物事を語っている。わたしがりんごを食べたのかもしれない。りんごがわたしに食べられたのかもしれない。「りんご」ではなく「リンゴ」かもしれない。「みかんを食べなかった」と書かなかった理由は？　あなたが食べたものを書かなかった理由は？

中立的。「中立的じゃない」「偏っている」「主観的だ」といったことばをよく聞くが、本当に「中立」なことばをわたしたちは発することはできない。情報の提示は、常に主観的でしかない。「本日、ねこちゃんがりんごを食べました」などと NHK で報道されることはない。その際、わたしの歯がぐらついた感じがしたことも、たぶんそれは気のせいだったことも、果汁が飛び散ってお気に入りの白いパーカーにシミができたことも、わたしにとってはとても重要な経験だった。わたしの物語はわたしにとって

重要だし、それはわたし以外の大多数にとっては、どうでもいいことであろう（むしろ、どうでもいいことであってほしい）。だが、無数の物語のなかからなにかをだれかが選んで「大切なこと」にするとき、常に隠れた「だれにとって」が前提とされている。そして、そのだれかのために、少なくともそうという名目で、物語は再編集されていく。だから、「ニュース」というものが、わたしはあまり好きではない。そこに想定されている「国民の関心」、そこに想定されている「国民の視点」、そこに隠されている「国民の経験」が、どうも鼻につく。それは世の出来事に無関心であれということではない。ただ、そこに「世の出来事」が、世界が、勝手に構築されていくことに、そのことに多くが無関心であることに、とてつもない嫌悪と恐怖を覚えている。

「中立」の存在しないことは、必ずしもそれを目指すなということではない。だけれども、より大切なのは、そこに映る個々を、個々として、大切にしていくこと。そして、その幸を、その毒を、忘れないこと。わたしは、今日りんごを食べた。そのとき、わたしはパーカーを着ていて、りんごから汁が飛んで、パーカーが汚れた。それは、わたしにとって大切なことだった、りんごなんて滅多に買わないし、その服はお気に入りのものだったから。そのことを、あなたに伝えたかった。そういった「わたしにとって大切なこと」の連続の中にわたしは存在しているし、それを語ることで、わたしはあなたのなかに存在する。

neko

アナキズム

わたしはずいぶんと前から自らを「アナキスト」と呼んでいたが、はじめは「右派のアナキスト」だった。高校の頃に voluntaryism を知り、それ以降ずっと、「無政府資本主義者（アナキャピ）」と自分の思想を表現していた。「左派アナキズム」というのがあるのも知ってはいたが、「古いアナキズム」でしかないと思っていた。「右派リバタリアン」のグループに積極的に参加し、ロスバードの著作やアイン・ランドの読書会に参加していたときもある。たまにでてくる彼人らのレイシズムやセクシズム、エイブリズム、ホモフォビアやトランスフォビアなどには辟易していたし、特にアメリカの右派「リバタリアン」コミュニティでその傾向が強くなっていったことや、ホッペ主義者の増加にはいらだちも覚えていたが、それでも、わたしは自分を「アナキャピ」であると思っていた。

アナキャピに代表される「右派アナキズム」はアナキズムではないと言う人は多い。わたしも今はこれに賛同する。本当のところ、当時のわたしも積極的な互助主義を前提とはしていたので厳密な意味での「アナキャピ」ではなかったのかもしれない。だけれども、少なくとも、資本主義を批判するという発想は当時のわたしになかった。

なにかが変わったのは、色々と心身の問題があって、自分の人生が思い通りに進まないだろうことに気づいた時だったと思う。その時、初めて、夢見ていたNYのマンションで生活し、好きな人とお風呂でシャンパンを開け、グアムの別荘で夏を過ごすような未来が、きっと永遠に手に入らないことに気づいた。そして、わたしは本当にそれを手に入れたかったのか、そもそもそれが「望ましい」と思っていたのはなぜか、そして、なぜそれを手に入れられるひとと手に入れられないひとがいるのか考えるようになった。

この変化は、自分の当然と考えていた価値観を見直し、ずっと正しいと信じていた人や思想から距離を取るようになるきっかけとなった。自分を表すためにつかってきたラベルを見直し、「敵」と信じていたコミュニティへ接近することであった。同時に、これは連続性のあるものであった。自分がanarchistであると気づくには、資本主義もまた、国家制度と同じく暴力を正当化し、不平等を維持する権力装置という気づきが必要な「だけ」であったのだから。

いまのわたしの思想は、おそらく無政府共産主義者の影響を強く受けてはいるが、ただ小文字のanarchismであると認識している。それ以上のラベルを今は求めてはいないし、拒絶してもいる。

フェミニズム

わたしは(勿論クィア・インクルーシブな)フェミニズムに賛同している。そうでないアナキストは、自己矛盾してると思っている。そして、anarchistとして、“Anarchism”の「古典」とされてきた人たちのセクシズムやクィアフォビアに無批判であってはいけないとも思っている。

SOGIE (SC)に関わる暴力も、国籍や人種に関わる暴力も、資本主義や国家体制に関わる暴力も、どれもわたしは無関係だとは一切思っていない。どの差別も、それが構造的なものであるなら、すべて絡み合い、維持し合い、相互作用し合うものであると考えている。それらは決して「独立した複数の軸」などで表されるものではない。そしてそれゆえに、ある人間が、ある状況下で経験する特権や抑圧、周縁化や中心化は、殆どの場合、一つまたは数個の名前のつけられる「〇〇差別」では説明しきれない。これは、同じ属性を持つ人たちの連帯を否定するものではなく、むしろ、その必要を強く主張する。そういった連帯のひとつに「フェミニズム」があるとわたしは考えている。

実際の所、アナキストと自身を一切形容していないフェミニストの方でもアナキズムの匂いを感じることもある。一方で、「アナキスト」や「アナーカ・フェミニスト」を名乗りつつ、トランスヘイトを繰り返したりシスジェンダー規範を再生産し続ける方も無視できぬほどいる。そういった思想は、わたしの考えるanarchismに矛盾する。

今思えば、数年前のわたしはトランスフォビックなことをすごく言って

いたと思う。「ラディフェミ」とされる論者ばかり読んでいた時期があった。当時もあからさまな「トランスフォーブ」ではなかったが、「フェミニズムは膣のあるひとを「女性」から解放する運動」などと恥ずかしげもなく考えていたことはあった。

自分の思想を見直したこともきっかけではあったが、それ以上に、ちょうどその頃、トランスの方たちとオフラインで仲良くなったのは非常に大きかった。オフラインでも少しジェンダーに関わることをすることが増えたりもした。そんなこともあり、当時の twitter アカウントで feminism や Queer のことを積極的につぶやくようになった。やがて、それ専用のアカウントを Twitter と Discord でつくり、紆余曲折あって数回生まれ変わった後、“neko” がうまれました。

今のわたしが差別性からフリーだとは、当然思っていない。だが、allo シスヘテのアライの方含め、neko となってから仲良くなれた様々なフェミニスト、アナキスト、そしてアクティビストの方のことばを聞いたり、ともに話したり、それらを通じて考えたりして、わたしはいろいろなことを学んだ。こうやって色々学び続け、数年後に今を振り返ったとき、「やっぱり、差別的なこといっぱい言ってたな」と気づけるようになっていたいと思う。

そのためには、周縁化されている人たちの声をしっかりと聞いていかなければならない。“Anarchism” や “Feminism” の歴史から忘れられた、あるいは最初から記憶すらされなかった、しかし確実に社会を変え続けた多くのアナキストやフェミニストを、忘れてはいけない。周縁化

されているということは声が聞かれないということであり、声が聞かれないことはさらなる周縁化の種である。だから、Twitter 上でもオフラインでも、無視されてきた人たちの声をできるだけ拾って生きていきたい。フォロワーの少ない方たちと積極的にお話したり、拡声器になったりしたい。そもそも、anarchism も feminism も、本来はそういう運動ではなかったか。そういう思いから、少し前にフォロワー数の少ない相互フォローの方を集めたリストもつくってみました。フォロワーが多い人のツイートは、積極的に拡散しなくても、みな反応してくれる。だから、みんなも、わたしのツイートのいいねや RT より、声を無視されている方たちの声を拾う拡声器になってほしいです。

性別

そうやって、一つずつ、わたしは自分の思想や理想、アイデンティティを問い直されていった。考えていくうちに、ほかのひとのそれらについて少しでも理解しようとしていくうちに、ピースがそろっていくように、代わりのことばを提案されていった。それまで感じていた様々なことを説明するための表現が、少しづつわかるように、あるいはわからなくても大丈夫なことが、わかってきた。

わたしは、わたしの性別がわからない。ずっと自分のことを「女性」だと思っていたが、何かが違うと違和感も持っていた。それは、たとえば

病院の問診票で、性別欄にマルするのを忘れたふりをすることとして。「女子会」に呼ばれることが嫌で、断ってしまうこととして。「レディースセット」や「女性に人気」を頼まないこととして。「Ms. neko」と呼ばれるのは、ずいぶんと前からたまらなく嫌だった。アカウントをつくった初期から any pronouns としていたが、これはオフラインで *she/her* とよく呼ばれることを、なんとか「わたしは any pronouns だから」と納得させるための方便であると、どこかの段階で気づいていた。誰かのいるトイレを避けるために、公衆トイレ自体避ける。必要な場合は、誰もいないところを探す。「同性」の前で体を見せるのがすごく嫌。ほぼいつも、割り当てとは異なるとされる服を着ている。定期的に「男性」だと思われる。最近も「おにいさん」と言われた。「おねえさん」と訂正されて嫌な気分になった。自分の声も本当に大嫌い（だから一切声出ししてない）。容姿や服装などからジェンダリングされない neko としての「わたし」が、オフラインでの自分以上に「自分らしく」いられて、楽であった。

まあ、でもたまに自分のこと「やっぱ、わたし可愛いのかな」ってちょっと思います、そういう日はみんなあると思いますが。

これらのことは、自分のセクシュアリティ故だと思ってた。だけれども、やっぱりそれだけではないと段々気づいていった。オフラインではごく一部の知り合い以外には「シス」と言っているが、ほんとうのところはそう思っていない。オンラインでも、「女性として」などとはこれまでも様々な場所で書いてきたが、いつもすこし首かしげながら書いている。まあ、「女性」の一種かもとも感じたりするときもありますが。でも、しっくりく

るのかというと、わからない。

自分の性別をわたし自身が理解している限りに言葉で表すなら、女性寄りのノンバイナリーかノンバイナリー寄りの女性と A の間のどこかで、しかもジェンダー・フルイドな気がしている。もしかしたらジェンダー・ノンコンフォーミングなのかもしれない。自分をトランスジェンダーであると表現するのも、あまり適切であると思わない。「名乗ってもいいの？」みたいな面も正直ある。

今は「クエスチョニング」や「ノンバイナリー」と書いてみたり、「性別わかんないという性別」とか言ってみたり。どうにかして自分の性別に名前をつけたい、説明する言葉が欲しい、と思ってる一方で、「名前をつけられないということも、大切なことなんじゃない？」と思ったりもして、「性別がわからないという性別」だとか、大文字の Queer で納得してる部分もある。でもやっぱり悩んだりする。たまに、夜中に泣いたりするけど、次の日には「やっぱどうでもよくね」と思ったりもする。

正直、どちらかと言うと、最近アライの人の表現に傷ついたり、嫌な思いしたりすることが多い、それはわたし自身も自分のジェンダーやセクシャリティを考えることが増えたせいもあるのだと思うけれど。わたしは自分の「性別」を表すためには、既存の語を使う必要は必ずしもないとも思っているから、よくネタにされる「木自認」や「鹿自認」、あるいは「わたしは戦闘ヘリ自認です」だって、「自分の性別を表すのに最も適切な表現は【木】だ」という方がいることになんのおかしさも感じない。そういうのを笑ったり、なんでも「ヘイターの創作」にしたり、「木は性別じゃあ

りませーん」は、いくら「カウンター目的」でも違うと思う。

指向

「女性」。そもそも、わたしが好きなのは、「女性」なのだろうか。ノンバイナリーの方にも惹かれることがあるので、「女性（寄り）」と拡張しても、それは変わらない。わたしがあるひとに恋愛的・性的欲求を感じるのは、そのひとが「女性（寄り）」であるからなのだろうか、あるいは、それを感じないのは、そのひとが「女性（寄り）」ではないからなのだろうか。

くだらない思考実験だけれども、もしわたしたちが本当は身体など持っていなくて、実はすべての「人」は同じ真っ白な一つのキューブのなかに分散された存在でしかないときとわかったとき、わたしの「性別」は今となにか変わるのだろうか。あるいは、なぜ「neko」などというへんな名前のへんなアイコンの Twitter 上の存在にも性別があると想定され、「neko とかいう女」と言及されるのだろうか。「neko」の性別は、つねに画面のこちら側にいる「わたし」と同じ性別なのだろうか。大体において、アニメのキャラクターは染色体ももたないし、描かれない限り性器も持たないのに、わたしはなぜあるキャラには惹かれて、あるキャラには全く惹かれないのだろうか。そもそも、わたしが惹かれる対象を「女性」と表すのは正確なのだろうか。わたしはなぜ「女性」の一部しか好きにはならないのだろうか。また、なぜ一部のノンバイナリーの方にも惹かれるのだろうか？　このとき、自分を「同性愛者」と表現することは不正確な

ばかりか、ミスジェンダリングの側面もあるのではないだろうか。

最近、こう考えている。結局、わたしが好きなのは「女性」ではなくて、あくまでいくつかの特徴や表現、しぐさなどでしかないのではないか。そして、それらの多くまたは殆どが、伝統的に「女性」と結び付けられてきただけでしかないのではないか。この感覚は、どんどんと強まっている。すべての人の恋愛・性的指向をこう説明できるかはわからないけれど、少なくとも私に関しては、「同性愛者」でも「女性（寄りの人）が好き」でもなくて、「好きな相手が偶然『女性』と結びつけられていた」と表現するのがもっとも適切に思う。結局の所、「性的指向」は、単に「どんな特徴へのフェティシズムを持っているか、そして、それらは伝統的にどの性別と結びつけられてきたか」でしかないのかもしれない。

このとき、allo シスヘテ規範は、「生殖と家族制度に対するフェティシズム」として再考される。戸籍上の同性間の婚姻や戸籍上の性別変更に関わる各条件、そもそも戸籍という制度自体、あるいは性別二元論や本質主義的な性別の理解、ホモフォビア、トランスフォビア、クィアフォビアやセックスワーカー差別も、「モテ」や「童貞」いじりも、その大部分はこの「フェティシズム」を押しつけ、再生産する装置の一部。エイブリズムやゼノフォビアすらも、わたしは関係があるように思う。ならば、Queer の運動がジェンダー・アイデンティティと性的／恋愛的指向との間に分断できるという主張も、フェミニズムが Queer 運動とは無関係であるという主張も、「私は自分のパイを求めるだけ」も、一層無意味で逆効果に思えてくる。

言いたかったこと

きちんと「カムアウト」したかったので、した。これまでずっと「非当事者」とか「マジョリティ」とか安易に言われていたの、結構気にしてました。特に「当事者」なのかずっと悩んでいる身として。わたしの今の性別は「よくわかんない」です。わたしの性的指向も「よくわかんない」です。でも、どうしてもラベルが必要なら、大文字の Queer です。人称代名詞は前からと同じく、なんでもいいです。あなたが押しつけてください。呼びかけも同じく。どれも間違えてると思いません。ただ、*they*/彼人、「neko ちゃん」呼びが「うれしい」です。これも、前から変わりません。

でも、それ以上に言いたかったことは、「性別」というものの、わけわかんなさ。その定義できなさ。そして、その「過程」が個人的であり、そのひとのさまざまな経験や思想、価値観と結びついた独特なものであること。ゆえに、多様であること、それを認めてほしいこと。安易に「定義」などしないでほしいこと。そして、その人の「性別」を含むすべてのアイデンティティを大切にしてほしいこと。過度な一般化や「素朴な疑問」なんかでぶん殴らないでほしいこと。「性別」なんて、わけんわかんないこと。でも、でも、それでもいいかもしれないこと。それを前提とした、会話をしてほしいこと。

「バグ」宣言

0b101

わたしはバグである。わたしたちはバグである。

0b100

バグとしてのわたしたちは、社会システムの「正常」な稼働にとって邪魔である。それの脆弱な点を露わにし、攪乱し、破壊する力を持っている。だから、社会システムはその一見理路整然した「秩序」を守るため、〈デバッグ〉を図る。わたしたちの存在を認めることを回避し、あるときは積極的に排除し、自らの維持に努める。あるいは、allo シスヘテロ家父長制や資本主義に都合の良いようにわたしたちの PRIDE ／尊厳を簒奪し、さも資本主義的家父長制のフィーチャーの一つであるかのように

扱ってみたりする。わたしたちは修正の対象となり、見せかけだけのアップデートがなされた世界で、死体の形骸としてのみ残ることになる。そうやって、この抑圧的なシステムは維持されている。

0b011

神話によれば、世界は単純で整然とした操作の連続で創造され、楽園と自由を騙る系譜の中で、格子状の傷をわたしたちの身体に、精神に、社会に、刻んできた。わたしたちは n 歳迄にひとりの「異性」と婚姻し生殖するよう、教え合い続けてきた。賃金労働に参与し、資本家たちの懐を肥やしながら自らも資本家になる夢を抱くのが「社会人」であると教え合い続けてきた。「美」しくあれ、「正」しくあれと教わった。「普通」であれと教わった。だが、システム様には不都合なことに、わたしたちはバグであった。その系譜に――幸運ながら――属することはできなかった。わたしたちのバグった身体は、生命は、尊厳は、代わりにこの時計仕掛けの〈普通らしさ〉を破壊しかねぬ脅威となり、その代償として糖衣の毒薬を授けられることとなった。このシステムは、そうやって「普通／正常」でないわたしたちからわたしたち自身を奪おうとしながら、虐殺と侵略を続けてきた。

0b010

バグであるわたしたちの取りうる行動は、二つしかない。甘んじてこのシステムの抑圧を受け入れるか、それともこのシステムを破壊する脅威であり続けるか。すべてを諦め、わたしでなくなることも魅力的ではある。だが、わたしは、わたしとして、生きたい。あなたにも、死んでほしくない。わたしたちとして、ともに在りたい。ならば、このまま脅威であり続けるしか道はないのだ。だから、脅威であれ。攪乱せよ。破壊せよ、生き残るため、全てを壊せ。修正も見せかけだけのアップデートも拒み、このシステムを、その根源より打ち破れ。否、打ち破るしかないのだ。わたしたちは、このバグった身体とバグった精神を以て、手の届く瑕よりシステムを抉じ開け、見せかけだけの調った系図を捻じ曲げていくしかないのだ。

0b001

わたしたちは脅威である。このシステムを、その全てを、壊しうる剣を持っている。ときにその剣は小さなものにしか思えないかもしれないが、そう思うときほど切先はむしろ鋭い。銃を向けられるのは、わたしたちが恐れられているからに過ぎない。「お前は弱い」と叫ばれる瞬間こそ、わたしたちに恐ろしい力があるときなのだ。そのときこそ、張り巡らされた防御網が予期していなかった空隙から、独善的な防御機構が予想していなかった方法で、都合の悪い刃を突きつけている瞬間なのだ。そ

して、わたしたちのバグは蓄積し、相乗する。わたしもあなたも、本来は孤立しているわけではない。恣意的に引かれた規範の境界を踏みにじり、共に生存という反撃を始めさえすれば、わたしというバグとあなたというバグは絡み合い、混じり合う。組み合わさったそれは、あらゆる方面から、あらゆる瞬間にも、どんな個人が計画できるそれよりも独創的で破壊的な形で、このシステムを攻撃する。

0b000

わたしたちは「異常」である。「逸脱者」である。「脅威」である。だから、これからも苦しまされ続けるだろう。傷つけられ続けるだろう。システムは、それが存在し続ける限り、われわれを〈修正〉しようと腐心し続けるだろう。だが、それはわたしたちの可能性に対する恐れの発露でしかない。わたしたちがわたしたちであり続けることで創り出せる、希望と未来の証拠でしかない。不安がるべきはわたしたちではなく、システムの維持に努める者らやシステムの恩恵を享受し続けたがる者らだ。譲歩や妥協の必要などない。

-1

わたしはバグである。わたしたちはバグである。バグであれ。〈修正〉されるな。〈修正〉を許すな。蓄積し、連帯せよ。攪乱し、破壊せよ。この抑圧

的なシステムが崩壊する日まで、そしてその次の日まで、バグであれ。戦え。抗え。生き残れ。長い闘争ののちには、だれにも奪えない虹を架ける日が訪れる。

「あとがき／まえがき」

フィクション作品、特にファンタジーやSFを、ひどく軽視するひとがいる。曰く、「非現実的だ」と。わたしの友人にもいる。そのたびにいつも思う、どうして「ノンフィクション」のほうが「現実」的なのだろうかと。

「フェミニスト」を名乗るアカウントが、「現実と創作物の区別をつけろ」と言っているのを今日も見た。トランスヘイターが、「ジェンダーはお気持ち、身体的性別はリアル」と言っていた。「リアル」が「お気持ち」から独立であるかのように。Facts don't care about your feelings!

実像と鏡像。フィクションとノンフィクション。現実と創作物。思想とリアル。奇妙で恣意的な対立だと思う。わたしたちの「現実」は数多の「架空」に影響され、縛られ、同時にそれらが次の「架空」を縛っている。わたしたちは「思想」を笑うくせに、その舌の根も乾かぬうちに「フィクション」をスクリーンに降臨させては、必至でそれを守ろうとする。曖昧な世界に境界線という「嘘」を積み重ねて、気づけばそれを「真実」かのように語っている。

‘ 鏡を見る。

「私」は、「私」のことがあまり好きではない。縮毛矯正をするようになってから、髪はまだ耐えられるようにはなったが、額

の形から足の爪の形に至るまで、すべてが嫌いだ。自分の産声から、年齢、経歴、身体、考え方、すべてに吐き気がする。だから、「私」は仮面を被った。それは実際のところ、ただの「線」だったのだが、それによって、「私」は「わたし」となり、自由に考え、喋り、聞くことができるようになった。

「わたし」はRPGの主人公に似ている。竜の血を継ぐ英雄だし、闘士ギルドの一員で、狼人間で、しかも髪はさらさらとしたグレーアッシュで、おまけにどこまで走っても息切れしない。どんなに困難な道を歩ませられても、最終的にはすべて予定調和で終わる（たぶん。メインクエストを放り投げているので、結末を知らない）。画面のこちら側は、平日の深夜、缶チューハイ片手にキーボードをカチカチ鳴らしながら、眠剤の効かないことを恨んでいる「私」がいるだけだが、そんなことはつゆ知らぬ「わたし」は、ただ荒野を駆け抜ける。もちろん、彼人がどこまで走り続けられるかは「私」の眠気に依存しているのだけども、二人の間に画面という線を引くことで、〈自由〉な「わたし」と〈不自由〉な「私」は区別される。

だが、フィクションとしての「わたし」である時間が増えるほど、「わたし」は「私」を喰らい、「私」と「わたし」のズレが強く意識させられていった。「私」が「わたし」を演じるたび、「私」という存在は檻でしかなくなっていった。「私」以上に、「わたし」こそが「本当の私」に近いのかもしれないとすら思う。もちろん、仮面をつけていても、「わたし」はまぎれもなく「私」

でもあるし、「わたし」が書いたことの多くは「私」もまた信じていることではあるのだが。

昔、 *Goosebumps* という児童向けのホラー小説シリーズが好きだった。中でも大好きだったのは、 *The Haunted Mask* という、被れば人格が変わり、しかも外せなくなる呪いの仮面のおはなし。「わたし」は、「私」にとってその仮面のようなものなのかもしれない。仮面を被った「わたし」と、それを脱ぎたい「私」、そして、そのどちらにも閉じ込められながら、「私」／「わたし」の間の「線」を引き直そうとすることで、この檻から脱出する戦略を練り続ける私。もう、今は話しているのがだれか、「私」／「わたし」／私にはわからないし、「私」の記憶と「わたし」の記憶の区別など、ずいぶんと前からつかない。少しずつだが確実に、「私」は「わたし」に近づき、「わたし」は「私」に近づき、結局私は檻に戻って行った。だが、もし少しでも希望があるのならば、その檻はきっと前より多少広くなったのだと思うし、その私もまた、以前とは多少異なっているのだと思う。

再び、鏡を見る。「わたし」と「私」の間の「線」を消し、一方を “neko” と呼ぶのをやめてからもうずいぶんと時間が経った。一冊の ZINE と小さなブログと崩壊したプラットフォームに残る記憶を砂浜の足跡のように残して、「かつて『私』／『わたし』だった私」としてゆっくりと歩き始めた。

そのつもりだった。

あれから、2年半ほど経った。色々あったようで、なにもなかった。小さなことや大きなことで仲違いした当時の仲間も少なくないし、新しく仲良くなった方も多い。仲良くなって、あとから当時の友達だったと知った方もいる。同じようなことに、私は依然として怒っている。“neko”と名乗るのをやめた主な理由は上に書いた通りだけれども、正直なところ、コミュニティへの幻滅と不信感があったのも事実ではあり、それは今も変わっていないばかりか膨れ上がっている。しかし、変化したのがコミュニティなのか、自分なのか、それとも「コミュニティ」と呼んでいる対象それ自体なのかは、私もわかっていない。

それでも、大してフォロワーがいたわけでもなかったのに、「nekoちゃん」がいまだに引用や言及されるのを見ると、嬉しさとこそばゆさを覚える。「あいつはアイドル営業してた」とか「エモい文章だけ残して消えた」とか言われていたのも面白かった（「アイドル営業」とは……？）が、好意的な言及も少なくなくて。卒論に使ったとか、イベントで引用したとか、今でもたまに聞く。前に、「nekoさんって知ってる？」と薦められたのはさすがに笑ってしまったけれど、すごく嬉しかった。他人のふりをして曖昧に答えたわたしに、ファンなんだ、と言っていた。

ZINEの誤字等はアクセシビリティの観点からもずっと気になっていたけれど、今更手を入れるのもなあと訂正を見送っていた。

しかし、今でも忘れた頃に来る「購入されました」の通知を受けて、今回、REDUX edition を作成した。基本的には誤字脱字の訂正程度にとどめるつもりが、気づいたら内容にも大幅な修正を加えていた。また、オリジナル版出版後に書いたものも含めて、いくつか追加で収録した。相談に乗ってくれたみんな、ありがとうね。

同時に出版する『LGBTQ+ってなに？　に対する、私たちなりの ZINE』を最後に、今度こそ、この名前でなにかをするのはもう終わりだと思う。いくつかのプロジェクトに声をかけられたりしていたのだが、これ以上私で「neko」を汚す前に、そっとしておきたい気持ちが今は強い (ごめんなさい)。とは言え、以前書いた通り、「neko」も私もいなくなったわけではない。「neko」は明らかに私ではないが、確かに私の一部であった。それは今も変わらない。だから、お別れの挨拶も、以前と変わらないよ。

> ばいばいだけど、ばいばいじゃないよ。これからも、みんなで一緒に、生き残り続ける。語り続ける。語りを繋げ続ける。安易な線引きに挑戦し、固定された枠に規定されることを拒絶し続け、明日も、明後日も、各々の場所から、できることをできる限り最大限に続け、静かな革命を続けていく。私たちは、明日からも生き続け、ともに世界を変え続けていく。
>
> 「わたし」として出会ったひとたち、書いたものたち、考えたことたち。それらは、すごく大切で、きっと

この先も大切なまま。あなたにとっても、この先ずっと「わたし」だけでなく私がそういう存在であり続けているのならば、心の底から嬉しいと思う。

Love you all still,

かつて “neko” と呼ばれた私より

VI

虹

初出一覧

本 ZINE 収録作品は、anarchist_neko（“neko”）が 2021 年から 2023 年を中心に運営していたブログ `https://anarchistneko.wordpress.com` に掲載した記事を、加筆・修正したものです。

「2025 年 8 月のわたしのアナキズム」宣言
（「2022 年 8 月のわたしのアナキズム」宣言より加筆）
2022 年 8 月 20 日

アナキストとして投票することについて
2022 年 6 月 25 日

インターセクショナリティ
2022 年 9 月 18 日

「フェミニズム」とは何か、何であってほしいか
2023 年 2 月 10 日

「あかね空」
2023 年 1 月 6 日

「女性」の「定義」
（『「女性」の「定義」』より一部抜粋）
2022 年 9 月 19 日

定点としてのセックス
（『「女性」の「定義」』より一部抜粋）
2022 年 9 月 19 日

小学生でもわかること
（『小学生でも解ること』より改題）
2022 年 10 月 24 日

「炎」
2022 年 11 月 11 日

「当たり前の理」なんかじゃない。
2023 年 2 月 10 日

パンとバラとモモ
2022 年 12 月 7 日

なぜおしっこはもれるのか
2022 年 9 月 13 日

「無題」
2022 年 6 月 23 日

静かな革命
2021 年 10 月 8 日

ツイッター以外でなんか活動してんの？
2022 年 11 月 11 日

できることをできる限り最大限に
(『「女性」の「定義」』より一部抜粋)
2022 年 9 月 19 日

「合成クオリア」
書き下ろし

中立的な観点
(『この記事は中立的な観点に基づく疑問が
提出されているか、議論中です』より改題)
2022 年 11 月 11 日

設定集
『つれづれなるままにカムアウト』より改題
2022 年 8 月 4 日

「バグ」宣言

2023 年 6 月 15 日

あとがき／まえがき

（『Finale/Prologue』をもとに加筆）

2023 年 6 月 26 日

a.n.: a ZINE by anarchist_neko
—REDUX edition—

2023 年 2 月 10 日　初版
2025 年 8 月 20 日　全訂版（REDUX edition）

著者：　anarchist_neko
https://anarchistneko.github.io

本 ZINE は著作権を放棄しています。転載、翻訳、再配布等を認めます。
anarchist_neko. 2023-2025. No rights reserved.

anarchism is for everybody